

鈴がなれば恋に落ち、恋に落ちれば神にもなれる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

流水岩碎拳とか旋風鉄斬拳とかいっぱい拳法があるけどネーミング的にも使い手的にも掌鈴拳が一番言いやすいし可愛いと個人的に思う。

目次

風が吹けば桶屋が儲かる

『誠の恋をするものは、みな一目で恋をする』（シエイクスピア）

突然だが君は恋をしたことはあるだろうか。部活で人気だったあの娘、隣に住む幼馴染のあの娘はたまた近所のお姉さん：振り返ってみてほしい。もちろん、「そんなのねえよ!!!」ってやつもいると思うが、これから先にできると思うから気にすんな。

ここで重要なのは思い浮かべた人のほとんどは何かしらの積み重ねがあつて好意が生まれたつてことだ。優しくしてもらつたとか話すと楽しかったとか他にも色々あると思うがそんなところである。ここで問題になってくるのは一目惚れだ。十数年生きてきて一目惚れについての考え方を述べるなら、それって顔しか見てないじゃん：である。少女漫画じゃあるまいし、一目見て赤の他人を好みのタイプだなど思うのはまだしも恋愛的意味で好きになるなんてのはにわか信じがたい。

：と数日前の自分に恋愛観を語らせれば言うだろう。

くくく

彼女に会つたのはまさに偶然であつた。

その日は一年を通しても稀に見るような快晴の日である。あまりにもいい天気だったので柄にもなく近くの山にハイキングに向かつた。お出かけ日和だったからか山には多くの人が訪れておりとてもどかに登れるような雰囲気ではなかった。そこで俺はとてどもはファミリー向けとは思えない山道を登っていくことにした。

なれないことをしたからか数十分登つたころには息が完全に上がり動きが取れなくなった。ここで愚かなのは動きやすい服装以外の

準備を忘れ、飲み水を持ってこなかった自分自身である。

「あの…大丈夫ですか？」

チリン、と心地よい鈴の音がした。

彼女を見た時の感想は一言で表すのは難しい。容姿を伝えるなら身長はそれほど高くなく大きな釣り目に小さな口、三つ編みに結ばれた黒髪はくるりと一周巻いてわっかを作っていた。さらに特徴的だったのはその服装、ノースリーブの黒いチャイナ服、頭には自分の掌を大きく開いた時よりもさらに一回りは大きそうな鈴が二つついていた。

色々というべきことはあったと思う。しかしそんなことは彼女を見て完全に抜け落ちていた。まさに一目惚れであった。

「好きです。付き合ってください。」

「え…嫌ですけど…」

俺はふられた。俺は泣きながら山を下った。

しかし諦め切れなかった俺は下る前に軽く引く彼女に名前と週に一度あの山を鍛錬に使っていることを聞いた。

帰ってから何故もつと段階を置いてから話を進めなかったのか、あれでは悪く言えば不審者、良くてナンパ野郎がいい所である。そんなことを考えてさらに泣いた。

とりあえず次に会うときに息が上がりまくっているなんて状況にはならないように明日からランニングと筋トレを始めようと決意した。

くく

その日は非常にいい天気であった。鍛錬には雨が降っているくらいがちょうどいいと思う私ではあるが、偶にはこんな日があっても悪くはないなと気分よく山を登ることにした。

しばらく登っているとまさしく迷い込んだハイキング初心者といった男が肩どころか全身で息をしながら立っているのが見えた。いつもなら無視して自分の鍛錬に集中するところであるが天気の影響もあつてか、人助けと思つて声をかけることにした。

「あの…大丈夫ですか。」

彼の顔を覗き込む形で声をかけるときよつとしたような表情をした後そのまま氷のように体が固まった。かなりの静寂があつた。失礼な奴である。大丈夫か、と声をかけてやっているのだから大丈夫だとまでは言わなくても相槌くらいうつぶきなのではないだろうか。

そう思っていると彼の口がようやく開いた。

「好きです。付き合ってください。」

今度は自分が固まる番であつた。今この男はなんと云つたのであるのか。聞き違いでなければ好きだ、と言つたような気がする。安否確認に対する返答ではない。

不審に思いもう一度男を見てみると目を見開いた状態で私の返答を待っていた。悲しいことに聞き違いではなかったらしい。私はとんでもない男に声をかけたときつそく後悔した。

「え…嫌ですけど…」

勿論だが断つた。答えを聞いた男は明日にも世界が終わるような顔をしていた。

どうして今日偶然出会つたような男の告白にOKを出せようか。顔自体は悪くはないが、そもそも私はそういう恋愛ごとに興味がない。今日だつて気分が良かったから声をかけただけで、いつもなら気にすら留めない。もっと強くなつて戦うこと楽しみに生きているよな私である。

「冗談が言えるようならまだ大丈夫そうですね。この先はさらに陰しくなるので引き返したほうがいいですよ。」

「あ…あの…、趣味でこの山に毎日登ってるんでしょうか！」

男は半泣きであった。よくこの流れでその話題がふれるなど逆に感心したくらいである。

「週に一度鍛錬で使っているだけです。毎日登ってません。」

つい勢いに流されて私もバカ真面目に返事をしてしまった。そもそも今は鍛錬の途中である。大して困っていない以上この男に付き合う必要はない。

「もういいですか？先を急ぎたいんですけど。」

「えっと…最後にお名前だけ…お聞きしても…。」

先ほどとんでもない男に声をかけたと思っただが勘違いであった。

こいつは私があつてきた人間の中でもぶつちぎりでやばいやつらしい。どう考えても名前を聞くタイミングではないであろう。まだ最近噂でよく聞く怪人というやつらのほうが話がしやすそうである。

「…リンリンです…。」

これ以上聞かれないように名前だけ言って山を登ることにした。何かまだ言いたそうにしていたがそんなことは知ったことではない。こんないい天気なのに心は曇で覆われているような気分であった。

もうこの山使うのやめようかな…。切実にそう思った。

~~~~~

「リンリンさん！好きです！付き合ってください！」

「嫌です。鍛錬の邪魔なんで帰ってくださいませんか。」

ふられた回数を数えるのは十回を超えてからやめた。悲しくなつてまくらが毎晩びしょびしょになるからである。

俺は初めて彼女と会った日から山登りにランニング、筋トレを欠か

すことなくした。週に一度彼女を見かけて告白してもそもそも足すら留めてくれない。彼女を山頂までそのまま追おうとしても追いつけないどころか岩場を進むことすらできなかつた。彼女を見ていると一度のジャンプで俺の三倍は高く飛び岩場も息を切らすことなく登っていく。明らか人間業ではなかつた。それでもどうにか彼女に追いつこうと毎日必死で山を登った。彼女にできるなら自分にできないことはあろうか。それに最後まで登り切ったら彼女が待っているような気がした。

もちろん妄想である。

我ながらかなりきもいと思った。

だが、その努力が実を結び彼女が鍛錬をしている広場のような所までたどり着くことができた。なおここまで、約数か月かかった。

たどり着いたとき彼女は非常に驚いた顔をしていた。久々に彼女の顔を正面から見たような気がする。横顔も良かったが、正面から見る彼女はまたなんとも言えない良さがあった。

「貴方も懲りないですね。いい加減諦めるということ覚えたらどうなんですか。」

久々にちやんと話しかけた彼女はあきれられるようにそう言った。

そういえばここまで自分が何かを必死に継続してきたことなどあつただろうか。勉強もやるとはいっても徹夜づけがいいとこであつた、得意教科は平均よりも高く、苦手教科は平均を下回り。スポーツもせいぜい下手くそとは言われなくらいで部活でやっているような連中にはてんでかなわなかつた。辛いことをわざわざ続けなくてもそこそこの評価が貰える、死ぬまでこんな感じなんだろうなとその時は思っていたような気がする。

だが、そうはならなかつた。彼女に会えることを思うと毎日のトレーニングは全く苦にはならなかつた。まるで魔法にでもかかったような気分である。

そんなことに思いを巡らせていると続けてリンリンは口を開いた。

「それで、ここまで来てどうするんです。いつものアレも終わりましたし、特に面白いものが見れるわけではありませんよ。さつきも言いましたけど鍛錬中なので帰ってくれませんか。」

「じゃあ、その鍛錬手伝わせてください!!!」

この間コンマ一秒。何も俺はただ数か月無心で山登りをしていただけではなかった。というのも、彼女との交流をシミュレーションしていたのだ。前みたいの話が途切れるような真似は侵さないために。しかし、この提案にはかなり無理があったような気がする。そもそも彼女と俺では全く相手にならないであろう。今回はこれ以上印象を下げないためにも一度下山して日を改めたほうがいいかもしれない。

「……いいですよ。ちょうど組手の相手を探していたので。」

「やっぱりダメですよ……今なんて?」

「いいです、といったんです。貴方が言い出したんでしょう、それともやっぱりやめますか。」

「いえ、やらせてください!」

「それと敬語はやめてもらえませんか。貴方のほうが年上でしよう。すごく違和感があります。名前も呼び捨てで構いませんので。私も貴方に気を遣うのは面倒くさくなってきました。」

有無を言わせない目つきであった。目線だけで熊も殺せそうである。

「わ、分かった。よろしく。リンリン」

「よろしく……えっと……名前なんだっけ。」

「レイジだ。」

「そ、レイジね。覚えとく。」

この後の組手で俺はぼろぼろにされた。

リンリンの武術ははつきり言って素人の俺が目で追えるレベル

じやなかった。掌鈴拳というらしい。帰り際にダメ元でリンリンの好みのタイプを聞いてみると、私より強い人と言われた。はたして自身の三倍も高くジャンプできる人間よりも強い男がいるのかは甚だ疑問ではあったが…。

俺は好きな娘のことをほとんど知らなかったのだと思った。

とりあえず帰ったらこの町にある一番大きい道場を訪ねてみよう。

くくく

あの日から数か月あの男はどうとう私が鍛錬している広場までたどり着いた。

何度も山道で見かけそのたびに告白してきたが、もういつそ気に留めないことにした。私は鍛錬のためもあってかなり険しい道を通っている。私のところまで来るにしてもかなりの重装備が必要だろうしそうなる私移動速度には追いつけないであろう。そのうち諦めてこなくなるだろうと踏んでいたのだ。

しかし、一向に諦める気配がないことに三か月ほどして気づいた。週に一度気まぐれで来ているこの山に来ると必ずあいつがいるのである。ここまで来るとストーカーではないのかと思ったこともあった。しかし、見ているうちにだんだんと私についてくるようになってくるのが面白くなってきた。正直ここまで来れると考えてはいなかった。

今まで私に拳法を習いに来たやつもたくさんいたが、皆口先ばかり、そのうちだれも私についてこなくなった。戦うための技を磨いているのだから苦しいのは当たり前である。なのに、やれ辛いだの優しくしてくれだの、彼らは何を習いに来ているのかと疑問に思った。

その点この男はあきらめが悪かった。今までの奴らより才能はないが根性がありそうだと思った。最初はただのナンパ野郎かとも

思ったが：案外話してみると面白いかもしれない。もし、諦めずに私のところまで来れたら話くらいは聞いてやろうかという気分になった。

「リンリンさん！好きです！付き合ってください！」

登つての開口一番であった。ここまで来るといつそすがすがしいときえ思う。

「嫌です。鍛錬の邪魔なんで帰ってくださいませんか。」

つい流れで強く否定してしまった。話を試してみようと考えていたのである。必死でここまでたどり着いた相手に強く言い過ぎたかもしれない。

「貴方も懲りないですね。いい加減諦めるということを覚えたらどうなんですか。」

なぜか考えていることと逆の答えが出てくる。もしかすると、傷ついてもうこの山にはこなくなるかもしれない。そう思うとうまく言葉が出てこない。

「それで、ここまで来てどうするんです。いつも告のアレも白終わりましたし、特に面白いものが見れるわけではありませんよ。さつきも言いましたけど鍛錬中なので帰ってくださいませんか。」

ついつい相手を傷つけるような言葉ばかりが出てくる。そういえば最後にまともに人と話したのはいつだっただろうか。最後に出ていった門下生は私に何と言ったのだっただろうか。そんなことが頭をぐるぐるとめぐる。そんな私の思考は彼の一言で断ち切られることになった。

「じゃあ、その鍛錬手伝わせてください!!!」

そう言って腰を直角に曲げて頭を下げる彼に目がいく。なんだかその時の私はものすごく変な顔をしているような気がする。

そのあとのことはよく覚えていない。彼の名前を初めて知った。長い間知り合いだったような気がしていたのに…。

私は私を好きな奴のことをほとんど知らないことを知った。

帰ったらもう少し話す練習をしよう…。